

## 論文

# 牧畜村落におけるオボ-祭祀の復活及び祭祀儀礼の再考

—内モンゴル・モガイト村のイケ・ツァイダム・オボ-を中心に—

白 莉 莉  
BAI Lili

### はじめに

本稿は、中国内モンゴル自治区において牧畜の要衝とも言われているオルドス市オトク前旗のモガイト・ガチャ村落にあるイケ・ツァイダム・オボ-祭祀の復活ならびに祭祀儀礼を考察し、経済発展と社会環境の変化の激しい今日、牧畜村落におけるオボ-信仰の伝承と変遷の実態について事例の分析から明らかにする試みである。

オボ-とは、昔からモンゴルの各地で石や灌木の枝、芝生、土、レンガまたは雪を高く積み上げて造られてきた物であり、土地の守護霊の住む場所である。モンゴルの土地とは、本来個人や家族の所有ではなく、地域の社会集団が共有するものであった。故に、ある土地のオボ-は、そこに住む社会集団の守護霊の住まう場所であり、それらの集団により毎年定期的に祀られてきた（吉田 2006：257）。

牧畜地域社会におけるオボ-信仰は、日本でいう地域社会の信仰的核心を形成する氏神信仰と性質的に類似している。一民族の宗教的中核を形成してきた固有の信仰は、政治的イデオロギーのもと国家権力体制に影響されることも少なくない。日本でいうと、特に明治維新以降は、地方の神社を国家権力内に引き入れようとし、民間で用いられた神々の本来の呼称は、公式な場所に中央の名の高い神社の名が冠せられるようになった（桜井 1989：303-312）。中国内モンゴルのオボ-信仰の場合、清代の盟旗制度の実施後、「盟・オボ-」、「旗・オボ-」と称される行政体中心のオボ-が地域において最も影響力を持つようになり、今日もなお公的色彩を帯びている。

また、日本の「神仏習合」と対比して言えるのは、16世紀後半においてチベット仏教がモンゴル社会に伝播し、在来のオボ-信仰を通して遊牧民の生活実態と精神世界に浸透し、オボ-の聖域選択から祭祀儀礼までラマ僧が参与するようになったということである。外来宗教と在来の固有信仰は相互に影響し、今日も地域において仏教寺院とオボ-とその他の民間信仰が併存し、互いに影響しつづける。

中華人民共和国が成立し、大躍進と人民公社制度及び「民族融合論」思想の影響で、1950年代末期から、民族文化施設が閉鎖され、民族習慣の放棄も強いられた。オボ-祭祀もこの時期から停止させられ、さらに文化大革命期における祭祀の禁止とオボ-の破壊を経て、80年代の初めから公的な復活を見せはじめた。復活に当たって、本来地域の行政と深い関わりを持つ祭祀規模の大きい「盟・オボ-」、「旗・オボ-」と対照的に、牧畜村落の共同体によるオボ-祭祀がその固有の特徴を表して

いる。

本稿では、内モンゴルの典型的な牧畜村落において、地域共同体との関わりからオボ-祭祀の復活および祭祀儀礼の現状を明示し、今日の牧畜社会におけるオボ-信仰の特徴について検討したい。

## I 先行研究

吉田順一は、近現代における内モンゴル東部地域の歴史的経緯、東部地域の農耕化・漢化や社会変容の差異が各地域のオボ-崇拝及びオボ-祭祀の儀礼に及ぼす影響を与えたかを考察している。氏はオボ-研究について、オボ-というのは、地域社会とその住民に深く関わる存在であるにも関わらず、地域の社会及び住民との関連で考察することは皆無といった状態であると指摘している（吉田2006：255-257）。

オルトナストは、内モンゴル・シリントグ盟のウジムチン地域におけるオボ-の各構造要素（配列、荘厳具など）、ウジムチン地域のオボ-祭祀の儀礼過程に関して詳細に調べ、各儀礼に託された牧畜文化の意味合いを検討している。これはオボ-祭祀儀礼における地域の比較研究に重要な意義を持っている（オルトナスト2008）。

ナランビリゲは、内モンゴル・オールドス市オトク前旗のオボ-祭祀を事例にオボ-祭祀を営む集団の帰属意識、オボ-文化の継承、オボ-祭祀に付随して実行される行事などについて検討している（ナランビリゲ2009）。

アルプタン・ダゴラは、内モンゴルのウラーン・チャブ<sup>(1)</sup>地域の「旗・オボ-」の復活、変容、伝承とその意義を社会変動のコンテクストの中で考察を試みている（アルプタン・ダゴラ2010）。本稿で扱う村落のオボ-と対照的な研究対象となるので、少し分析を加えたい。

「旗・オボ-」は清代に内モンゴルで確立した行政単位の「旗」の名を冠した公的性格を持つオボ-のことを指し、昔から主宰者は旗政府から派遣され、祭祀に全旗の人々が参加する。費用は主に旗の財政及び旗に所属する下の行政が支える。ダゴラ氏の研究によると、ウラーンチャブ地域は人口構造の変化と農地拡大により「旗・オボ-」が本来の場所を離れて北へ移動<sup>(2)</sup>し、交通や地理的な原因により、元の旗・オボ-の公的な機能が失われることもある。したがってその復活に当たって、本来「旗・オボ-」は旗の行政機関が関わるのに対し、近年では逆に地方の牧民たちの主体的な要望により復活が実現する事例も見られるという。

一方、中国社会主義市場経済を背景に、伝統的な文化を観光資源化し、地域の経済発展に貢献させようとする機能変遷の時代性も注目すべき点であると指摘される。例えば、2009年にウラーン・チャブ市チャハル前旗の旗・オボ-が復活した。モンゴル人が2%しか占めないこの地域において、税金を使って人口の大多数を占める漢民族の生活環境と馴染まない祭礼を行ったということで批判も多かったが、地方行政は、交通の便利な地理的特徴を最大限に利用し、地方の観光業の発展と地域のアピールをはかることが最大の目的であると主張している（アルプタン・ダゴラ2010：55-56）。

上記と類似した事例をあげると、シリントグ盟アバガ旗の元旗・オボ-のエルデニ・オボ-は、2004年に47年ぶりに現在のシリントグ市のオボ-として復興された。オボ-の建立に市政府は二年間の時間をかけて工事を進めた（オルトナスト2003）。建立後の最初のオボ-祭祀の日に、第一回と

なるシリント遊牧文化節も開幕した。こうした地方行政の目的は、上記のチャハル前旗の旗・オボ-の復活と極めて類似している。筆者は同オボ-の2010年のオボ-祭祀と第七回の遊牧文化節に参加して観察を行ったが、昔ながらの公的色彩が保たれる一方、時代に応じた変化も顕著であった。本稿においては民間で復活したオールドス市オトク前旗モガイト・ガチャ村落のイケ・ツァイダム・オボ-の祭祀事例を中心に考察する。ダゴラ氏の検討した旗・オボ-の復活と対照させながら、本稿では主に村落社会との関わりに注目し、オボ-祭祀の復活の特徴を検討したい。

## II イケ・ツァイダム・オボ-復活

### の経緯

オトク前旗は内モンゴル自治区オールドス市の西南部に位置し、南は陝西省、西は寧夏回族自治区、北はオトク旗、東はウーシン旗とそれぞれ隣接し（図1を参照）、旗の面積は12,180 km<sup>2</sup>であり、人口は約7.4万人である。内モンゴル自治区全体においてモンゴル族は人口全体の13%しか占めないが、その中でオトク前旗ではモンゴル族が31%を占め、モンゴル族の割合が最も高い地域であり、モンゴル族を主体とした少数民族地区である。本稿で取り扱うイケ・ツァイダム・オボ-は、オトク旗の旗役所所在地のオラジャチ鎮から約72キロ離れたナンソ鎮のモガイト・ガチャに位置する（図2を参照）。

モガイト・ガチャは主に牧業を営んでいる村であり、128の世帯、550人の人口からなる<sup>(3)</sup>。その内、モンゴル人の世帯は99戸で人口の70%を占める。村の面積は38万haで、一世帯は平均2,000ha以上の牧場を所有する<sup>(4)</sup>。地理的に内モンゴルのモーオソン砂漠<sup>(5)</sup>の西南端に位置するため、一年の降水量は250mm～400mmであり、地面はやわらかい砂地で、主に乾燥に強い灌木性の植物が生える。

### (1) イケ・ツァイダム・オボ-の歴史

モガイト・ガチャには現在、村の中心にあるツァイダム丘の頂に位置するイケ・ツァイダム・オボ-と村の南のフテリン湖の畔に位置するフテリン・オボ-という二基のオボ-が存在する。土地分配



図1 オトク前旗の位置



図2 調査地の位置

制の政策により、調査対象のイケ・ツァイダム・オポーは、現在牧民のバヤンチョットの牧場に入っている。バヤンチョットはオポーの主宰者グループのメンバーであり、上の三世代からこの地域に住み、昔からイケ・ツァイダム・オポー祭祀の主宰を担当してきた。景観的に見ると、オポーを中心に、東南、西南、西北、北の方に4~5キロ離れたところにそれぞれ長男のノルブの家、次男のシラホの家、三男のセンゲの家と四男のバヤンチョットの家が建ち、オポーは四人の兄弟の家に囲まれている状況である。

イケ・ツァイダム・オポーが建てられた歴史について、長男のノルブは以下のように語る。

ノルブ：イケ・ツァイダム・オポーの主宰者グループのメンバー、1938年生まれ

わが家族は上の二世代（19世紀半ば頃）からこの地域に住みつき、私と子どもたちの世代を入れて五世代目になる。父親のラシニマによると、昔はこのツァイダムの辺りに灌木が高く生え、家畜が中に隠れて見えないほどだった。所々に清らかな湖ができて四方八方から家畜の群れが集まってくる自然が豊かな地域だった。この周辺は人家が少なく、イケ・ツァイダムを囲んで十数軒しかいなかった。しかも互いの距離は何キロも離れていた。豊かな自然と豊かな家畜に囲まれて人々も豊かに暮らしていた。

しかし、ある年に夏は乾燥が続き、冬は雪の災害が襲い、人々も疾病にかかったり、強盗が発生したりするようになった。地方の人々が物知り（ラマ僧）に占いをしてもらおうと、ここにオポーを建てて、怠りなく祀り続ければ、すべての災難が解消されると言われた。それで、地方の人々が集まり吉祥たる日を選び、このイケ・ツァイダムの中心にオポーを建てて、毎年旧暦の6月2日に祭祀を行うようになった。

近年民俗学者ソナムとアルビンバヤルの二人は、オトク地域に分布しているオポーの基本データを集め、オポーに関わる伝説を数多く書いている（ソナム、アルビンバヤル2001）。イケ・ツァイダム・オポーが造営された経緯は、他のオポーと基本的に同じパターンで語られている。要するに、自然災害と社会動乱による不安定な生活環境の中、安定した暮らしの空間を求め、地域の安寧を願ってオポーが造営される。オポー祭祀は地域集団の生活と密着した牧畜儀礼の集約であり、牧畜民の世相観と世界観を如実に反映し、地域共同体の切実な要求、願望を満たす形で再生産され伝承されている（後藤1956）。

中国において民間の信仰習俗について研究する際に、文化大革命は無視できない歴史的時期である。終息から半世紀過ぎたばかりのこの歴史的出来事は、当事者たちの記憶にまだ明白に残っている。文革時期にオポーは「迷信」として認識され、すべての祭祀活動は強制的に停止させられ、オポー自体も革命者により破壊された。当時主宰者だったラシニマは妻のオルトナソンとともに「悪者、<sup>(6)</sup>牧主、富牧、階級者」などと批判され、「批闘」の対象として逮捕され、水利工程の労働現場へ行かされた。昼間は灌木を背負ったり、用水路を掘ったり、湖の魚を捕るなど様々な労働を負い、夜になると、非難されたり、殴られるなどのいわゆる「批闘」が行われた。五人の子どもたちは「富牧民、牧主の後代」と批判され、「労働改造」された。

すべての財産は回収され、住家も獣医点<sup>(7)</sup>となり、家で飼っていた“パラガル”と“アルスラン”と

いう二匹の犬も「人を咬み殺すほどの威勢がある」との理由で死刑と裁かれ、家の前の木を使って絞首刑にされた。一家を見守っていた犬は主人に先立って「プロレタリア階級により処刑された」のである。労働改造中、二人の老夫婦は野外に見捨てられていたテントに泊まり、厳しい生活の中、様々な虐待を受けた結果重病にかかり、母のオルトナソンは間もないうちに亡くなった。革命後に一家の罪は解かれたが、住処から家畜まですべての財産がなくなり、祀っていたオボ-も跡しか残らなかった。

1983年に87歳のラシニマは正式にイケ・ツァイダム・オボ-を復興させ、次世代の主宰者たちに次のように言い聞かせた。「我々が祖先から伝えられてきた故郷のオボ-を復活させたのは、民族の歴史文化と風俗習慣をわが子孫に伝えるためである。このオボ-を祀ることは、天の神々及び龍宮の神々を喜ばせるためである。オボ-を祀ることは家族及び地域の人々の命の為に祈禱し、また生活の順調を祈るためである。また故郷の豊かな降水、牧場の繁栄、人々の健康と暮らしの安寧を祈禱するためである<sup>(8)</sup>」。この遺言に従い後継者の主宰者グループはオボ-の祭祀を毎年怠りなく行っている。

## (2) オボ-とハサルゆかりの祭祀との結合

桜井徳太郎は、地域社会の祭祀と信仰について言及する際に、神社と民間信仰について、神社祭祀は部落または村落など広い地域に渡って多くの氏子を持ち、そうした広い地域の氏子の崇敬対象となるのに対して、民間祭祀はごく限られた小地域近隣集団か、家または同族によって私的に祀られる場合が多いと指摘している（桜井1987：305-309）。

内モンゴルの牧畜地域では、固有のオボ-祭祀以外にも民間で小規模に行われる様々な民間信仰が存在している。特に英雄崇拜の伝統を持つモンゴル族の間では、英雄たる歴史人物を祭る習慣が昔から伝承されている。

モガイト・ガチャにおいては、1950年代までにイケ・ツァイダム・オボ-の近くにフェルト製の祭殿があり、その中にチンギス・ハーンの弟、歴史上勇猛な戦士のシンボリック的存在であるハサルゆかりの守護神が祭られていた。昔ハサルがモンゴル軍隊を率いて西夏へ進軍する途中、現在のイケ・ツァイダム・オボ-より東南に700m離れた場所にある古い井戸のところで軍隊を止め一泊したと言われている。フェルト製の祭殿の中に、当時ハサルが使った道具などを祀り、すでに780年の歴史を持つとのことである。祭祀者としてティリュウワ・ゾマというお爺さんがいて、後継者がいないため姪のツァガン・オゾムが受け継ぎ、1985年にイケ・ツァイダム・オボ-の主宰者たちの協力を求め、復活を試みた。1950年代後半、国家政策により、民間で祀られていた祭殿はすべてオルドスのチンギス・ハーン陵に回収された。後にオボ-の主宰者たちは様々な策を講じて祭殿を元の場所に戻すことができた。

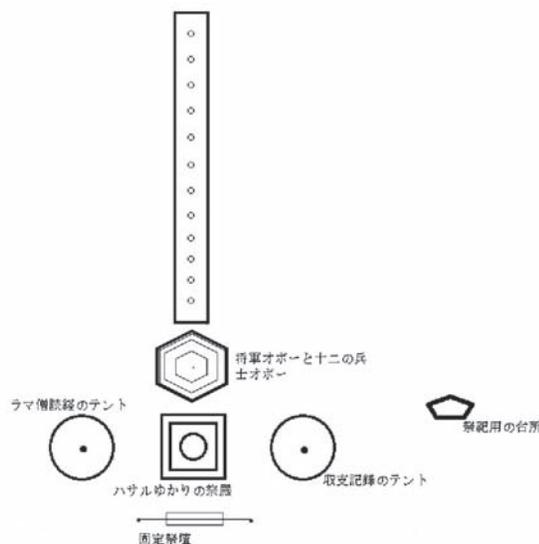


図3 上から見たイケ・ツァイダム・オボ-の祭場の図



写真1 イケ・ツァイダム・オボエの祭祀場

その際、後継者の依頼に基づき、ハサルゆかりの祭祀をオボエ祭祀と合併させ、毎年のオボエ祭祀の日に、ハサルゆかりの祭祀も一緒に行うようになった。現在のオボエ祭祀の主宰者グループにはツァガン・ウジム老人の息子が入っており、祭祀活動に協力している。

現在のイケ・ツァイダム・オボエの祭祀場は、前に小さな祭壇があり、中央にハサルゆかりの祭殿、両側にコンクリート製のゲル二軒<sup>(9)</sup>、後ろにオボエが建ち、オボエが建つ丘の麓に小さな台所が造られている(図3)。そこには祭

祀に必要な設備が整っており、周囲にポプラや松の木々が生えた美しい祭場を成している(写真1)。

2008年はイケ・ツァイダム・オボエがハサルゆかりの守護神を迎えた20周年ということで、祭祀は二日間行われ、オトク前旗の副旗長、ナンソ鎮の鎮長、副鎮長など地方行政の役人たち、またオトク前旗の教育機関やテレビ局などの公的機関からも代表者が祭祀に集まり、地方で非常に重要視されることになった。近年、中国は「政治文明建設」を提唱し、「豊富な民間文化は、文明たる政治の土壌である」と宣伝しており、地方における伝統文化の活動は、行政側からいつにない姿勢で重要視されている(逢春階2003)。

### Ⅲ イケ・ツァイダム・オボエ祭祀儀礼について

イケ・ツァイダム・オボエ祭祀はハサルゆかりの祭祀と結合したことにより、祭祀儀礼において一般のオボエ祭祀との共通性も維持されているが、一方で独自性も見られるようになっている。

#### (1) オボエ祭祀の準備活動

オボエ祭祀の前日になると、祭祀の場所を装飾する作業が行われるが、イケ・ツァイダム・オボエの場合、主に主宰者やその家族が参与している。現在オボエの主宰者グループは7人からなり、ノルブを始め6人のモンゴル人と李治国という1人の漢民族の主宰者がいる。<sup>(10)</sup>

以前のイケ・ツァイダム・オボエは、粘土で土台が造られ、上に灌木の束を挿したものであったため、歳月の風雨により外観が破損することがあり、祭りの際には、オボエの修復作業をする必要があった。社会の発展は、人の住処の改善にのみ反映されるのではなく、神々の宿る聖なる場所にも変化をもたらしている。近年、ハサルゆかりの信仰と結合した結果、80年代に復活した当時のイケ・ツァイダム・オボエは再度建造された。オボエの土台はコンクリートで固定されている。一基の將軍オボエは、基礎が易占の八卦(「乾=天、坤=地、震=雷、巽=風、坎=水、離=火、艮=山、兌=沢」)の原理で造られ、下から十二支、五畜、五頭の魔獣の順に三つの層があり、頂点に自然の石を積み、その真ん中に宝珠柱が立てられている。十二座の小さな軍人オボエは將軍オボエの後ろの石壇の上に一直線に並べられ、それらは「六本の旗、六本のソリデを持ちながら將軍オボエを守って

(11) いる」のだという(写真2)。ハサルゆかりの祭殿とテントもコンクリート製になっており、昔のように大規模な修復作業の必要はなくなっている。

オボ-の基本的構造としては、オボ-の中央に緑を象徴し、生命の繁栄を祈願する意味で生木が挿される。したがって毎年の祭祀の準備活動では、新緑の生木を更新する作業が非常に重要視される。特にオトクは灌木が多数生える土地であり、この地域には灌木のみを大きく束ねて出来たオボ-も見られるほどである。現在のイケ・ツァイダム・オボ-には、生木の姿は見られなくなったが、以前のオボ-に灌木が挿されていたのは確かである。

「生木は毎年祭りの前に更新しなければいけないものだが、現在牧場は鉄線で囲まれるようになったので、人の牧場に入り灌木を刈ることは不便となったのだ」と主宰者のノルブは語る。オボ-の基本的な構成要素から生木を省略した理由は納得しにくいものであるが、近年草原の生態環境の変貌に伴い、土地資源の私有権利という意識が強まり、家畜が牧草を追って越境すると揉め事を起こしたりする現象も見られると、地方の老人たちは語っている。

オボ-の生木を更新するために40キロも離れた場所に行って、鉄線の下をくぐって生木を採取するという事例は、オルトナスト氏の研究にも見られる(オルトナスト2003)。また、シリンホト市のエルデニ・オボ-の場合、オボ-の土台はコンクリートで出来ており、その上で松の苗を栽培し、自然に生えるように造営されている。一方、近年は東部の農耕村落においても昔のオボ-祭祀が復活される傾向にあるが、そこではオボ-の中央に生木と同時にトウモロコシなどの作物の種が撒かれ、自然に生える農作物の姿が見られる(写真3)。

イケ・ツァイダム・オボ-の祭りの準備作業において、生木を更新する作業は省略されたものの、祭日の日に祭場と祭殿を威風堂々たる場所として造り上げるために、祭場の周りに色彩豊かな旗を挿し、過去一年の風雨に曝されたオボ-と祭殿のハダク、ヒーモリなどはすべて新しいものに取り換えられる。

### ① 奉納物とその時代変化

オボ-に奉げる伝統的な奉納物は主に家畜と羊、山羊の丸煮とアイラク(発酵した乳)、チーズ、バター等の乳製品、また酒やレンガ茶など牧畜民が日常的に好む飲食物が中心である。<sup>(14)</sup>しかし、近年

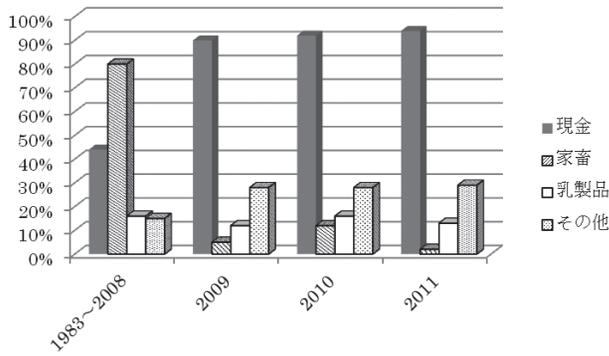


写真2 イケ・ツァイダム・オボ-と牧場の所有者バヤン・チヨット



写真3 内モンゴルフリー旗で近年復活した農耕村落のオボ-、オボ-の上に農作物が生えている

表1 イケ・ツァイダム・オボの奉納物の変化を表した図



オボ祭祀の主宰者グループで会計を務めるダルマ氏の自宅で保管している近年のオボの収支計算表により筆者が作成したもの。

オボの奉納物には、伝統的奉納物から現金を奉納するものへと劇的に変化している(表1)。

昔はオボ祭祀において、家畜とその丸煮を捧げることが一般的であった。イケ・ツァイダム・オボの奉納記録によると、1983年から2008年まではオボに家畜とその丸煮を奉納した世帯が80%以上を占めたが、2009年以降、伝統的な奉納物は急激に下がり、代わりに現金を奉納する世帯の比率が90%を上回っている<sup>(15)</sup>。その背景には、近年の市場経済の発展に

より家畜の価格が高騰し、牧畜生業が商業化したことがある。これに加え、禁牧政策による家畜の減少という原因も無視はできない。近年実施が開始された禁牧政策により、オトク地域の牧民の家畜の数は、以前と比べて約半分に減らされている。供物の変化により祭祀の日の会食にも影響が見られるようになった。2008年の時点では、参拝者が集まった時から祭祀が終わるまでの間中、お肉とお茶によるもてなしがあったが、現在は会食の前にお菓子とお茶が出され、会食の際には肉と野菜スープによるもてなしへと変わっている。

オボ祭祀の主な奉納物には、牧民の自家製のチーズやバターなどの乳製品とお茶、酒が含まれる<sup>(16)</sup>。しかし、近年の牧畜生業の商業化により、チーズやバターなどの乳製品を奉納する習慣は保たれているものの、その量は大幅に減少しているという変化が見られる<sup>(17)</sup>。

また2010年旧暦5月13日に筆者が参加し観察したシリント市のエルデニ・オボ祭りからは、町で暮らすモンゴル人たちが、酒や市場で購入したミルク、チーズなどをオボに捧げる様子が見られた。このように、牧畜生業を営むことができなくなったモンゴル人たちは市場販売の乳製品に頼るしかなくなっている<sup>(18)</sup>。

## ② 井戸の祭り

イケ・ツァイダム・オボより東南に約700m離れた場所に、元のハサルゆかりの祭殿の遺跡が

あり、その近くには昔ハサルの軍隊が利用したと伝えられる井戸の跡が残っている。これは、この地方では「祭祀たる水」(tahilg-a-yin usu)と呼ばれる。



写真4 ラマ僧による井戸に捧げる供物の浄化儀礼

祭祀の当日の朝、食事の前に主宰者とラマ僧たちが井戸のところに供物を持ってきて、儀礼用の薪を集め、井戸の祭祀を始める。ラマ僧たちは井戸を浄化する祈禱文(arigun sang)を唱え、主宰者たちは井戸の上に溜まったゴミなどを清掃し、その隣に薪を積んで火をつける。薪が燃えているうちに持ってきた供物などを井

戸に捧げる。この供物は、主にラマ僧によって浄化されたヤギや牛のミルクと炒め米を混ぜたものである(写真4)<sup>(19)</sup>。主宰者たちは供物を捧げた後、燃えている火の手前側から井戸に向かって跪いて参拝する。

井戸を祀るのは、「ボルハン・テンゲル(天の神様)」に雨乞いをし、この土地、ここの人たちの無病息災を祈願し、土地と龍の神様を喜ばせ、気候が順調であり、牧場が肥沃になるよう祈願するため<sup>(20)</sup>である。この井戸の祭祀には、厳しい物忌みが伴う。すなわち、最初に井戸をきれいに清掃しなければならない。オポー祭祀の奉納物には、病にかかった家畜が奉納されてはならない。また、葬式や出産に関わる人がオポー祭祀に参加することは避けるべきであるとされる。もし井戸の神様を犯すことがあると、オポー祭祀の際に天気が荒れ、さらに雨乞いなどの念願が叶えられなくなるということが強調されている<sup>(21)</sup>。

## (2) 祭祀儀礼の流れ

オルトナスト氏はその博士論文において、オポーの祭祀儀礼における神々の降臨を祈願する招福儀礼とオポーの神々に家畜を聖別する聖別儀礼について詳しく検討している。本稿では、紙幅の制限があるため、イケ・ツァイダム・オポーの祭祀儀礼という個別の事例をあげ、その祭祀儀礼の独自性と一般性について提示したい。

イケ・ツァイダム・オポーの場合、祭祀の当日に主宰者たちがオポーの祭壇を設け、供物を用意している間、参拝者たちは各方面からオートバイや車、馬などに乗って現れる<sup>(22)</sup>。

冬の終わりから初夏にかけて、家畜の出産と去勢、耳印、剪毛などの作業、搾乳期の多忙な仕事を経た後、オポー祭祀が行われる7月と8月は、牧畜歴において牧畜民が最も寛ぐことのできる時期である。新しい生命を迎えた家畜の群れがこの一年順調に育つことを祈願し、安定した降水量と牧草地の繁栄をオポーの神々に託すのが祭祀の目的である。その一方、オポー祭祀の場は、普段近隣同士であっても互いに顔を合わせる機会が少ない牧畜地域において、地域共同体のメンバーたちが情報交換をする場所ともなる。したがって、祭祀の日になると特に男性たちは急いで祭場に集まり、オポーと祭殿に参拝してから、臨時テントに入りお茶やお菓子を食べながら交流を始める。

現在、特にオトク地域の多くのオポー祭祀の際、オポーの神々に奉納する祈禱文は、主にラマ僧によって唱えられる。イケ・ツァイダム・オポーの場合、祭祀の前日から祭殿の右側のコンクリートゲルの中にラマ僧を招請し読経してもらう。祭祀の当日に招福儀礼が開始するまでの間、ラマ僧たちはテントの中で読経を続け、参拝者が集まってくるのを待つ。

祭場に入ってきた参拝者たちは、最初に祭壇の前に跪き、主宰者たちの祝詞によりハサルゆかりの神霊とオポーの神々に紹介してもらい、ハダクの上に供物を載せて捧げる(写真5)。主宰者がオポーの神々に参拝者の名前を報告し、その後奉納する供物を受け取



写真5 祭祀当日の参拝儀式

り、参拝者たちの頭に法灯を触れさせ、もう一度参拝者の名前を呼んで、「この吉祥たる日に参拝に  
来た人たちにすべての願いを叶えさせ、最大の愛を授けてくださるよう」と神々の保護を求め<sup>(23)</sup>る。そ  
の後、跪いたまま掌を地上につけ頭を下げ、三回礼拝し、立ちあがってからオボーを時計回りに回  
る。

個々人でオボーに参拝した後、次に参拝者共同で行われる招福儀礼が始まる。イケ・ツァイダム・  
オボーの場合、オボーとハサル神霊の祭祀が結合した結果、それぞれの招福儀礼が個別に行われる。  
最初にオボーの招福儀礼であるが、臨時の祭壇と供物をオボーの前に並べ、祭壇の前にラマ僧たちが  
座り祈禱文を唱える。参拝の人たちはラマ僧の後ろに座り、オボーに捧げる供物を持ち上げる。男性  
は前に座り、女性や子供は後ろに座る。ラマ僧たちが読経しながら、法螺貝を吹き、鉦を打ち鳴らす  
と、祈禱文のリズムに合わせて参拝者たちは手元に持つ供物を頭上で回転させながら「ホロイ、ホロ  
イ」と呼びかける。この一連の行動は、オボー祭祀において「招福儀礼」(オルトナスト 2003)、「ダ  
ララクをもらう儀礼」<sup>(24)</sup>(ナランビリゲ 2009)と呼ばれている(写真6)。

ラマ僧の読経がいったん止むと、男たちは立ち上がり、オボーと小オボーを時計回りに歩き回りな  
がら、手元のアイラクと酒をオボーのほうに撒き散らす。これは招福儀礼の「セルジムを供える」儀  
礼である。モンゴルでは、昔から普段の暮らしの中でも、女性たちは牛やヤギの搾乳作業が終わる  
と、勺を持ってミルクを空に向かってまき散らす習慣がある。また家族の誰かが長い旅に出る際や訪

問に来た客が家を離れる際に、後ろから順調な  
旅を願って同じ動作でミルクを散らす習慣があ  
り、いずれも「サチュリを供える」と言わ  
<sup>(25)</sup>れる。しかし、オボー祭祀の場合、この儀礼は  
男性によって行われ、女性が参加することは避  
けられる(写真7)。



写真6 招福儀礼の準備

招福儀礼と同時にその場で家畜の聖別儀礼も  
行われる。聖別儀礼は、「モンゴルの遊牧民た  
ちが所有する畜群の中から相性のよい家畜、あ  
るいは特別視される家畜を、天神、星座、仏、  
火神やオボーの主に生きたままに捧げる儀礼で  
あり、この儀礼は通常オンゴラホ Onyulaqu と  
いわれる」(オルトナスト 2003)。聖別の対象  
となるのは、その年に家畜が疾病にかかったり  
するなど、不幸なことが起きた場合に、牧民が  
家畜の安全と繁栄を祈願し、家畜の群れの中  
で最も元気のよい家畜を祭祀の場へ持ってきて、  
オボーの神々に聖別してもらう。首にハダクを  
結んだ聖別対象の家畜を、飼い主は招福儀礼の  
場所に連れてゆく。その家畜は、招福儀礼が終  
了するまでオボーのところにおいてオボーに降臨



写真7 セルジムを供える儀礼

する神々に捧げられる。聖別された家畜は、勝手に殺したり利用したりしてはならず、自然に老死するまで家畜の群れに置かれ、死んだ後で頭蓋骨をオボ-の上に置くかその近くに埋めるのである。

オボ-に対する家畜の聖別は、祭りの時期以外に行われることもある。筆者の調査中、主宰者のノルブは、イケ・ジョ-盟（今のオールドス市）の民族解放運動中に犠牲となった革命英雄ボル・バートル<sup>(26)</sup>という人物のことを語ってくれた。ボル・バートルは、人生の最後に、馬と共に故郷のオボ-に参拝してから敵軍との戦いに出発したが、間もなく馬だけが戻ってきたという。当時、主宰者のラシニマは、故郷の英雄を失った悲しみを抱きながらその馬をオボ-に聖別し、馬が年をとって死んだ後、主人のボル・バートルが亡くなった方向に馬の頭蓋骨を埋めたのだという。

近年、この地域ではラクダ、馬、牛などの大型の家畜の減少により、羊や山羊などの小型の家畜の放牧が主な生業となっている。オボ-祭祀では、主に山羊などの家畜を聖別する。ここには、生活を支えてくれる財産である家畜を疾病から守り、繁殖を祝う遊牧民の祈願が窺われ、さらに自然の神々への謝意を表すという新たな意味が加わるのである（オルトナスト 2003）。

オボ-祭祀の諸儀礼が終了すると、<sup>(27)</sup> ラマ僧たちはテントに入り休憩をとるが、参拝者たちはハサルゆかりの祭殿の前に集まり、ハサル神霊の祭祀儀礼が行われる。ハサル神霊をオボ-に迎えてから20年経つが、オボ-の主宰者たちは時折、チンギス・ハーン陵からダルハトを招き、祭祀の指導を受けている。その際、祭殿の前には、ダルハトと主宰者たちは前列に座り、参拝者たちはその後ろに座って、皆で「エジェン・サン」という祈禱文を唱える。

「エジェン」とは、本来の意味は「主」であるが、モンゴル人はチンギス・ハーンのことを「ボット・エジェン」（聖なる主）と呼ぶため、この「エジェン」はチンギス・ハーンのことを指す。「サン」は、祭祀に唱える祝詞のことを指す。ハサル神霊の祭祀は、この地方において昔は如何なる経緯で行われていたかは明らかにされていないが、現在はチンギス・ハーン祭祀の影響を受け、独自の性格が見られなくなっている。<sup>(28)</sup> 興味深いことに、ハサルゆかりの祭殿の中には、ハサルの肖像以外に、チンギス・ハーンの肖像も置かれている。

### (3) オボ-祭祀の付随的活動

最近オボ-祭祀に付随する競馬や相撲などの競技活動も、伝統的牧畜文化の変化を語る資料となり得るのではないと思われる。

まず、オボ-祭りにおける伝統的な競馬の方式を見てみよう。参加者たちは馬を連れてオボ-の前に跪いて参拝するか、馬に乗ったままオボ-を回ってからスタートラインに向かう。競馬の距離は祭りの規模により、普段は5キロから15キロの距離となっている。競馬のスタートラインはオボ-より南のほうに定められ、競馬の選手たちはオボ-の方向、つまり北に向かつて走る。<sup>(29)</sup>

イケ・ツァイダム・オボ-の場合、選手たちは馬を率いて祭場に入り、祭殿の前に跪いて参拝をし、祭場より南へ5km離れたスタートライン<sup>(30)</sup>へ向かう。競馬において遊牧文化の衰退を語る一つの現象は、草原における馬の群れの減少である。調査先で若い頃に馬の群れを飼って暮らしていたジラントッタホを取材することができた。彼の記憶によると、1970年代の半ばから、馬が急速に消えていった。当時から、大型の家畜は草原を破壊する規模が大きいと主張する政府によって、強制的に放牧が許されなくなったのだという。現在、イケ・ツァイダム・オボ-のような村落のオボ-祭祀に

において、競馬の参加者はほんの四、五人しか見られなくなっている。<sup>(31)</sup>

また、モンゴルの競馬文化において注目すべき変化に、競馬の方式がある。上述のとおり、モンゴルの伝統的な競馬は、北に向かって走る方式を取るものであるが、近年この習慣も多様に変化している。筆者が参加し調査を行ったシリングル市のエルデニ・オポーの場合、市の南の郊外に現代風の丸いコースの競馬場が造られており、オポー祭祀の当日の朝に祭祀儀礼が終了した後、午後になって市の南の郊外にある競馬場で競馬と相撲は行われるようになってきている。普段オポー祭祀の競馬と相撲は、地方の人々が競技活動として参与するものであるが、このエルデニ・オポーの場合、競馬場内に常に専門の競馬選手が駐在している。オポー祭祀の日には競馬場の客席に何百人もの観衆が集まるのに対し、競馬と相撲は数人の選手たちによりごく短い時間、披露されるのみとなっている。

また、本来モンゴル族の競馬において、馬を前もって調教することは大人の責任であるが、乗馬して競馬に参加する騎手は十数歳の子供であった。<sup>(32)</sup>しかし、現在の競馬では馬に跨る子供の姿は少なくなり、二十歳すぎの青年か、さらに中年の選手が見られるようになった。同じ現象は、シリングル盟のウジムチン地域を調査したオルトナスト氏も指摘している。氏はこの問題に対して、近年の子供の減少と学校教育によって、子供たちが草原を離れて町に滞在するようになった社会現象と関わりがあると分析している。筆者が調査したモガイト・ガチャでは、村の子供たちは旗政府の所在地であるオロジョチ鎮の小学校に通い、祖父と祖母が町に家を借りて孫の面倒をみるという現象が多くみられる。オポー祭りが学校で授業がある期間に行われる場合、子供たちはそこに参加することもできないということになる。これは、民族伝統文化の伝承にとって将来大きな社会問題となる可能性がある。

次に、オポー祭祀に付随する活動としてモンゴル族の相撲があげられる。内モンゴルの相撲の方式を見てみよう。相撲取りは、首にジャンガーという鮮やかな首飾りを垂らし、上半身にゾドグという前が開いた半そでの革製のコスチュームをつけ、下半身にだぶだぶとしたズボンを穿き、足には革製のブーツを穿く。そして入場の際には鷹の舞をする。これは、手を広げて遠くを眺めながら鷹の羽ばたきの所作をするもので、止まるときには鷹が飛んできて降りる所作をする（富川力道 2003）。しかし、オールドス相撲の場合は、相撲取りは下半身に柔道着のようなものを着ており、ひもを肩からタスキ掛けの形にかける。

モンゴルの相撲は、地域によって多様な方式と地域の土着性を持つものである。オールドス相撲の場合、タスキ掛けの形で、右手は肩の上に、左手は脇の下に固定させて、審判の合図で始まる（写真



写真8 相撲取り

8)。長時間続く場合は、腰に帯をつけて組ませる。そして相手を投げ倒せば勝負の決着となる。筆者が観察したイケ・ツァイダム・オポーの場合、選手たちは普通の服を着て上にタスキを掛けるのみで、上半身はタスキによってほとんど動けず、主に下半身により相手を倒すものであった。

節目の年などになると、相撲に参加する人数も多く、会場は多くの観客に囲まれて賑やかに行われる。しかし、通常の祭祀の際には、相撲

を見に集まる人々の雰囲気は変わらないものの、相撲を取る人は数人しか見られなくなっている。

最後に、競馬と相撲の優勝者、準優勝者に賞品が贈呈される。伝統的には、オボ-祭祀の規模によってラクダ、牛、馬と羊、ヤギといったモンゴルの「五畜」、またはレンガ茶などモンゴル人の日常生活に必要なものが対象賞品となっていた。しかし、近年は、市場経済による人々の価値観の変化もあり、賞品はすでに現金に変わっている（オルトナスト 2006）。イケ・ツァイダム・オボ-の場合、年によって少し異なるが、大体優勝者に 500 元、準優勝者に 300 元、優等賞獲得者に 200 元ぐらいの賞金が与えられ、それにレンガ茶などが付け加えられる。

一方、近年は草原の伝統技能の商業化が進み、コマ-シャリズムのベースに乗る傾向がますます増長している。2007 年に内モンゴル、ホロン・ボイル盟において、「中国・ロシア・モンゴル千人の相撲大会」が行われた。2011 年にはオルドスのオトク前旗において「内モンゴル上海廟（オトク前旗に所属する鎮の名称）首界競馬大会」が行われ、2,000 人を越える競馬選手が参加した。

イケ・ツァイダム・オボ-祭祀の現状からも窺えるように、経済の発展と社会の変動に伴い、内モンゴルの牧畜村落社会において伝統的信仰習俗はその社会に生きているモンゴル人によって伝承されている一方、多様化もしている。従来祭りは、神ごとと言われるように極めて宗教的であり、信仰的である。現代化が進むにつれて、伝統的祭祀に新たに付与される機能的変化及びそれに伴う人々の「祭り観」の変化について、今後更なる注目が必要であると思われる。

## おわりに

近代化が進む現在の中国社会は、特に少数民族地域において物質的に豊かになり、国の政策も伝統文化に対してある程度緩和されつつある時期である。しかし、一方では開発による自然環境の変化と経済発展を推進する地方政府の政策による生活環境の変化に伴い、伝統的な風俗習慣には、復活と変遷が並行する傾向が見られる。オボ-祭祀に関して見れば、近年、伝統文化を地元で産業化し、地元の経済発展に利用するために政府が主導して祭祀が復活するという現象も少なくない。

その一方、民間で復活している伝統的祭祀の時代的対応性も多様化をみせている。伝統文化の伝承が懸念される一方、現代的な手段を用いて祭祀を有効に利用しようとする試みも見られる。2009 年、イケ・ツァイダム・オボ-祭祀に付随する活動として、モンゴル語の歌と詩の大会も行われた。選手たちは、白髪のお年寄りから小学生まで民族の服装を着て、民謡とモンゴル語の詩を詠み、会場は溢れんばかりの熱気であった。大会が終了する際に、評価委員会の人々が以下のように発言した。

昔からオボ-は皆で集まり、心を合わせ、信仰を合わせ、また互いに情報を交流する中心地であったが、現在はさらに文化の中心ともなっている。我々牧民の心にこの様に深く染みついてきたオボ-は、この土地で代々伝承されてきた文化の魂であり、力であります。来年、再来年もオボ-に集まりこのように祭りを楽めることは非常に幸せなことだと思います。もし、貴方が心よりオボ-に信仰を持っていれば、オボ-の近くに一本の木を植えてください。一本の草を植えて下さい①。オボ-の周りに 100 種類もの植物が生えることは、我々にとって最高に喜ばしいことです。我々牧民の中には、無意識にオボ-の近くにある木の枝を採って遊ぶ人もいます②。こ

れはよろしくない現象です。このような聖なる場所では一本の草にさえ神霊が付いていることを、皆さんは改めて意識してください。

近年、特に内モンゴルでは草原の砂漠化という環境問題がしばしば取り上げられている。その影響で地方においては、昔から放牧地区の情報交換の中心であったオボ-祭祀の場を借りて、牧民たちに対する環境教育も行われていることが窺える(①, ②の如く)。牧畜地域において、オボ-は本来牧民たちの情報交換の空間であるという伝統性を活かしながら、現代的教育を伝えようとする地元の文化人たちの努力が反映されているといえよう。

筆者は本稿においてイケ・ツァイダム・オボ-祭祀を中心に論じてきたが、今後の研究において、地域の歴史民俗とオボ-との関わりについてさらに広い視点から深く考察していくことを目指している。

#### 注

- (1) ウラーン・チャブ地域は、自治区の首都フフホトに近く、南は河北省、山西省と隣接しているため、内モンゴルでは最も早い時期に漢民族による入植とそれに伴う農耕化が進められた地域である。
- (2) 近現代の内モンゴルにおいて、南の隣接した各省からの漢民族の移植により、古くからの住民であったモンゴル人たちは放牧の空間を求めて北の方に移動する傾向が基本としてある。したがって、オボ-もその祭祀集団である遊牧民の移動と共に移動させられるか、あるいは移植する漢民族により祀られたり、放棄されたりする現象が見られる。
- (3) 村の年輩者たちの記憶によると、自分たちが子どもの頃に、1世帯の牧場はおよそ2万~3万haであり、この周辺に10いくつかの世帯しか暮らしていなかった。現地の人口の増加と、50年代に隣の陝西省から多くの漢民族が入植したことに伴い、現在この村は128世帯までに達したという。村の形成過程とオボ-信仰の関わりについては別稿で検討したい。
- (4) 20年前から各世帯の牧場が鉄線で囲まれるようになり、家畜の越境を防ぐために、鉄線に軽い電気が流され、鉄線に当たると身体は軽く痺れる程度に保たれている。元来は明確な境界線がなかったため、土地の紛争問題が相次いでいる。1995年に、政府から正式に計器を持った人が来て土地の配分を行ったのだという。現在も未解決の土地の問題が数多く存在している。
- (5) 内モンゴル自治区オルドス市の南部、陝西省長城ラインの北部に位置する砂漠で、面積は約32,100 km<sup>2</sup>。降水量は250~400 mmであり、元々灌木の種類が豊かな砂漠性草原である。
- (6) 批判闘争。文化大革命の時期に、批判対象者に使う用語であった。
- (7) 家畜の病気を医療するところを指すが、地方では普段人工的に牝牛を胚胎させる場所でもある。
- (8) イケ・ツァイダム・オボ-の主宰者たちにより編集された『イケ・ツァイダム・オボ-がハサルゆかりの神霊を迎えた20周年の記念誌』による。
- (9) ゲル(ger)とは、モンゴル語の表現で、昔遊牧していた時代に遊牧民の住処を指し、フェルトで作った丸い形の白いテントであった。現在は、移動することもほとんどなくなったので、住処以外に倉庫や祭り用に、特に草原観光地においてこの様なコンクリートで建てたゲルが多くみられる。
- (10) 主宰者のノルブによると、「我々の祭りは民族分裂主義を促してはいけないので、上層(政府の意。民間の言い方)の指示で、主宰者グループに一人の漢民族を入れたのだ」という。筆者が調査の折に確かめたところでは、前日の準備活動には主にノルブの家族とその兄弟の家族、またハサルゆかりの祭祀の後継者エルテムトの家族が協力している。
- (11) 同(8)。

- (12) ノルブとジラントツタホらのインタビューによる。
- (13) ヒーモリとは一種の祈りの旗 (Prayer Flags) で、チベット文字の経文を印刷した布の護符である。オルトナスト氏の研究の中に、ヒーモリはオボ-の荘厳さをより表明する宗教的要素として詳しく検討されている。また、氏はチベット、ネパール、ブータン、モンゴルなどの国や地域の類似現象との比較研究も行っている。ヒーモリは、オボ-の胴体を巻く紐に付けておくか、大オボ-と小オボ-を結ぶ紐に掛けたりする。イケ・ツァイダム・オボ-の場合 12 個の小オボ-のそばに立つ木やスルデの間を紐で結び、紐にたくさんのおもりが飾られる。ヒーモリは参拝者によって奉納される場合もあるが、それによってオボ-に威風が加えられ、参拝者の威勢の向上、精神の昂揚に繋がると信じられている。現在も、モンゴル人のお年寄りが子供や若い人たちに授ける祝意の表現に「ヒーモリを身に付けよう！ (himori tai yab-u)」という言い方がよく使われる。若い人たちがいつでも精神昂揚でいることを願う。
- (14) モンゴル人の日常的な飲食物は、「赤食」と「白食」と言われることがある。「赤食」はいわゆる羊やヤギなどの家畜のお肉を指し、「白食」は家畜のミルクを材料にした家庭づくりのチーズやバターとアイラクなどを指す。
- (15) オボ-に奉納する羊の丸煮は、イケ・ツァイダム・オボ-の場合、2008 年の時点で約 20 匹使われていたが、奉納物の減少により、2009 年以降は数匹しか使われていない。
- (16) 牧畜民の自家製のバターは、胃腸の健康を調整するのに欠かすことのできないものであり、普通の食生活に重要な役割を果たしている。オボ-祭祀の際に、バターは供物としてオボ-に奉納されるほか、仏灯の燃料ともなる。従来オボ-の参拝者たちが持って来るものであるが、最近祭りに使うバターが足りなくなり、主宰者たちは牧民の家から集めるか、市場で購入することもある。
- (17) オボ-祭祀の主宰者組織で会計を務めるダルマが自宅で保管している近年のオボ-の収支計算表を参照した。
- (18) 商品用のビニールなどが散らばっているが、エルデニ・オボ-はシリゴル市が主宰し、伝統文化のシンボリック的存在とみなされているため、オボ-の近くに清掃員が置かれ、衛生環境を守っている。
- (19) モンゴル人は日常生活においてもミルクと生チーズで炒め米を混ぜて食べる習慣がある。現在も、町のモンゴル料理のレストランで生チーズを多めに使った「拌炒め米」は人気である。
- (20) 主宰者のノルブへのインタビューによる。
- (21) 同 (8)。
- (22) 牧畜地域においても機械化が進み、旅行観光地以外には草原で馬に跨る牧民の姿は普段ほとんど見られなくなっている。しかし、オボ-祭りの日になると競馬の競技に参加するつもりがなくても、馬をきれいに飾り乗ってくる子供や若者の姿が見られる。
- (23) イケ・ツァイダム・オボ-がハサルの守護神を迎えてきた後で、主宰者たちはチンギス・ハーン陵のダルハト (昔からチンギス・ハーンの祭祀を担当してきた人達) たちに四回も祭りの指導を受けていることから、この儀礼は明らかにチンギス・ハーン祭祀の影響を受けていることが窺える。
- (24) 「ダララク」という言葉は、モンゴル語の「手招く」という言葉に由来する。オボ-祭祀において神々の降臨を招く儀礼は、研究者によってその呼び方が少し異なることがある。
- (25) 筆者が育った東部モンゴルの農耕村落では、今日でも家庭でおいしい料理を作った時に、皆が食べる前に少量を取って屋根の方に投げる習慣がある。
- (26) ボル・バートル (1910~1948) : 内モンゴルのオールドス市オトク前旗モガイト村出身。1929 年からオトク地方の治安軍隊に兵役を服する。1936 年から中国共産党の人民解放思想の影響を受け、後に中国国民党の利益を代表するオトク地方の権力者と闘い、1948 年に戦闘中に犠牲した。犠牲後の 21 日目に中国共産党の党組織からボル・バートルのことを「中国共産黨員」として追認した。オトク地方では、イケ・ジョー盟 (今のオールドス市) の民族解放運動に献身した有名な英雄人物として語られている。現在、弟のダルマがモガイト村に住んでおり、イケ・ツァイダム・オボ-の主宰者の一人となっている。
- (27) チベット仏教はモンゴルの信仰習俗に大きな影響を与えたとはいえ、チンギス・ハーンを始めとする黄

金家族の祭祀やハサルゆかりの神霊の祭祀にはほとんど関わっていないことがわかる。それは、黄金家族の祭祀とハサルゆかりの神霊の祭祀に昔から特定の祭祀部族が存在し、特定の祭祀儀礼が伝承されてきたことによると推測される。

- (28) この地方に祀られているハサル神霊の祭祀について楊海英も論文の中で呈示しているが、その性格については言及していない。筆者は、今後モンゴルの「英雄崇拜」の視点から観察したいと考えている。
- (29) この仕来りは筆者が現地調査の折に、イケ・ツァイダム・オボの競馬係りのバト（ノルブの息子）に教えてもらった。筆者が調査先で、オルドス市ウーシン旗出身の若い作者ソ・ナルソの著作『青いテンゲル（天）に証明できるもの』（表紙にオボの写りが写っている）という著書を手に入れた。この中には、オボ祭りにおいて競馬の馬を北から南へ走らせた事例が言及されており、この著者は民族の誇りをもつ伝統習慣でさえも、今日さまざまに変化しつつあることに胸を痛ませている。ただし、この現象について学術的な実証がみられないため、今後実地調査に基づき検討したい。
- (30) 地域とオボの種類によっては、競馬の選手たちは馬に乗ったままオボを三回まわってから出発する習慣もある。（オルトナスト 2003）
- (31) 同じ現象はオルトナスト氏の研究でも言及されている。
- (32) 6～13歳の少年少女が一般的であるが、地域によっては10～16歳の少年が多いこともある（オルトナスト 2003）

## 参考文献

### 日本語の文献

- アルプタン・ダゴラ 2010年「内モンゴルにおけるモンゴル族の伝統的オボ祭りに関する研究——ウラアンチャグ地方の旗・オボ祭りの復活と変容——」『人間文化研究科年報 26号』奈良女子大学大学院人間文化研究所 pp. 53-65
- ボルジギン・オルトナスト 2005年「モンゴルの遊牧文化におけるオボ祭りに関する研究——ウジムチン地域の事例を中心に——」『旅の文化研究所研究報告書』14号 pp. 75-91
- ボルジギン・オルトナスト 2007年「オボ祭り——ウジムチン地域の祭祀文化に関する文化人類学的研究——」博士論文 千葉大学社会文化科学研究科
- 後藤富男 1956年「モンゴル族に於けるオボの崇拜——その文化における諸機能——」『季刊民族学研究』第20巻 日本民族学協会 pp. 47-71
- ナランビリゲ 2010年『モンゴル族のオボ祭り——内モンゴル・オトク前旗の事例にみる民族帰属意識・文化継承・現代化——』神奈川大学歴史民俗資料科学研究科博士論文
- ナランビリゲ 2011年「モンゴル族のオボ祭りにみる帰属意識——内モンゴル自治区オルドス市オトク前旗の事例から——」『年報 非文字資料研究 第7号』神奈川大学日本常民文化研究所 非文字資料研究センター pp. 413-430
- 櫻井徳太郎 1987年「神ごとと祭り」『民俗儀礼の研究』吉川弘文館 pp. 19-48
- 櫻井徳太郎 1987年「民間信仰儀礼の体系」『民俗儀礼の研究』吉川弘文館 pp. 136-163
- 櫻井徳太郎 1989年「地域社会の祭祀と寺院」『歴史民俗学の構想』吉川弘文館 pp. 303-336
- 櫻井徳太郎 1990年「民間信仰の歴史民俗学的考察」『民間信仰の研究』（下）吉川弘文館 pp. 71-74
- 富川力道 2003年「伝統的モンゴル相撲の近代的再生をめぐる」『スポーツ人類学研究』日本スポーツ人類学会 pp. 19-40
- 王珂 2001年「少数民族から「国民」への道程——現代中国における国民統合という視点から——」『アジア研究』47 No. 4 pp. 39-62
- 楊海英 2002年「十九世紀モンゴル史における「回民反乱」——歴史の書き方と「生き方の歴史」の間——」『国立民族学博物館研究報告』26巻3号 pp. 473-507
- 楊海英 2003年「漢族がまつるモンゴルの聖地——内モンゴルにおける入植漢族の地盤強化策の一側面——」

- 『民族の移動と文化の動態：中国周縁地域の歴史と現在』塚田誠之編 風響社 pp. 293-341
- 楊海英 2004年「アラク・スウルデの祭祀」『チンギス・ハーン祭祀——試みとしての歴史人類学的再構成——』風響社 pp. 233-296
- 吉田順一 2006年「近現代内モンゴル東部地域の変容とオボ-」『アジア地域文化学構築』アジア地域文化学叢書 雄山閣 pp. 255-282

#### モンゴル語の文献

- アルピンバヤル, ソナム共著 2001年『オトク・オボ-』内蒙古大学出版社出版
- ダランゴルバ 1992年「ハプト・ハサルの祭祀」『蒙古民俗研究』ナ・サイシヤルト編 内蒙古文化出版社 pp. 123-152
- ラッデナ・バンサル著 2010年『チャガン・トロガイ人文』（オルドス古籍文献シリーズ, 68）内蒙古人民出版社 pp. 119-130
- ロブソン・チョイダン著 1981年『蒙古風俗鑑』内蒙古人民出版社

#### 中国語の文献

- 包貴貞著 2008年『近現代蒙古族宗教信仰の変遷』中央民族大学出版社
- 鄂曉南, 鄂・蘇日台著 2006年『原生态民俗信仰文化』内蒙古大学出版社
- 逢春階「伝統文化と政治文明」〈[www.dzwww.com/dazhongribao/dazhongzhoumo/20030613166.htm](http://www.dzwww.com/dazhongribao/dazhongzhoumo/20030613166.htm)〉(2011年7月20日にアクセス)
- 賽音吉日嘎拉編著趙文工訳 2008年『蒙古族祭祀』内蒙古大学出版社